

---

# **魔法少女リリカルなのは～蒼き閃光と呼ばれた男～**

伊佐未勇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～蒼き閃光と呼ばれた男～

### 【NZコード】

N3797P

### 【作者名】

伊佐未勇

### 【あらすじ】

この物語は、片山 晓がリリカルなのはの世界に転生される話です。

もうデバイスとか、キャラ設定などが崩壊してしまつカオスが起りえる物語です。

一体、主人公は新たな世界で何を掴むのか、ご期待ください。

片山 晓（前書き）

この小説は、処女作です。  
皆さんに不快な思いをさせてしまつかもしれません。  
それでもよいと書つ方はどうぞ

## 片山 暁

俺の名前は「片山 暁」といいます。

俺は、いま意味不明な状況下の元にいます。

何故かと言つと、目の前で「俺」が血まみれで倒れている

のです。

「あれ？あれ俺だよね？じゃあ、俺は誰？」と叫びより何？倒れる俺？の周りに人だかりができている、そこにクラスマート達もいる。

みんなが青い顔で倒れる俺を見ている、泣いている人もいる。

で、何故か浮いている俺。

「俺浮いてますやん！！！」

どうゆうことなんや、いや落ち着け、COOLになれ俺、とつあえず今日の事を想い出そう

今日は、朝8時に学校へ登校、授業を受け友達と馴染り、帰り道でたしか子供を助けたんだ。

「思い出した！！俺子供を助けたんだ！！！」

「ようやく思い出しましたか・・・」

「あんたは！！！」

「そう私は・・・」

あの幽白を読んでいた俺が間違えるわけがない。

「あなたは、コヒ○マさん！！！」

「そう私はコヒ・・ちやうわ、私は神さんの秘書や！！！」  
神様？何言ってんのこいつ、そつ言おうとした時。

「あんたは、死んだんや。」

「何をえつ？？？」

頭がまた混乱した、俺が死んだ？じゃあ俺は誰だ？

「話は後や、今からあんたを神さんの所へ飛ばす、じゃあ  
「飛ばす？へつ、ちょっと、まつて、ぎゃアアアアアアアアア  
「ア」

そして、今俺の前で神様が土下座している・・・

「なぜ？？？」

神様らしき人に問い合わせた。

「私の犬のせいで書類が汚れ君が死んでしまったんだ」

ああ、俺つて神様の犬に殺されたのか〜（笑）

「まあ、いいや」

「へつ？」

神様が間抜けな顔をしている、そんなに驚いたのだろうか？

「別に未練なんて無いしね」

「じゃあ、別の世界には興味はないか？」

別の世界？ああ世で言う「転生」ってやつか。

「無いと言つちやあ嘘になるな」

「じゃあ、リリカルなのはの世界に行つて来てくれ

りりなのかあ〜まあ文句はないだろう。

「ええよ、その代わりチートな能力をくれ

「いいだろう、言つてみなさい」

俺が要求した能力は、直死の魔眼と写輪眼そして、投影魔術、ペルソナ、千鳥系の忍術

それと、魔力はEXそして、デバイスとユニゾンデバイスだ。

「わかつた、では行くのだアアアアアアアア！」

「へつ、いや何でそんな唐突なんだよ！……」

そしてこの俺「片山 晓」は旅立つていった・・・

片山 晓（後書き）

「いや～、いきなり死んじゃったよ」

作者「次回の話は・・・」

「無視かよ！――！」

作者「俺は怖いんだよ！――！」

「何が？」

作者「小説の感想だよ！――！」

「まあ、やつちまつたもんはしじがねえよ」

作者「・・・・・・・・」

「ああもう、作者はこれから俺が次回予告するぜえ」

次回は原作キャラの登場、曉のデバイスが火を吹くぜ次回も読

んでくれよ！――！」

作者「へたくそか！――！」

何かアドバイスがあれば、コメントをください

蒼き閃光、大地に立つ

俺は、今落ちています、何故かつて？いきなり目の前が青一面の空になつたからさ・・

つてこのままだと、死ぬ・・・いきなり！－！

「どうすればいいんだ？」

「俺を使え」×2

何が聞こえたて俺はさういたテハイフを忘れていたことは

「あんたちは？」

反応がないただの屍のようだ  
・  
・  
・

「なんでだよ、名前を決めなきゃならんかってだ!!!!!!」

「アーティストのためのアート」

何だ、俺のほかに先落ちていいやつがいるんか？

「「いるよ、ここに一人」

「お前らは？」

はで  
ど」かで見たことあんたにどな思し出せん  
：

「竜田町、町向かへまへ」。

湯介?日向?まさか・・・

「なのはじやなかつたのかあアアアアアアアア」

「突っ込むのはいいが早くどうにかしたほうがいいぞ～」

「舞の世界」の「舞」

「マジで・・・ってなんで、

「アーヴィング、アーヴィング……！」

「よし、わかつた」

あれ? どうやんのかわからねえ!!!!

「とりあえず名前を呼べ」

「どうちの! ?」

「空だから、陽介だな」

「OKわかつた。いくぜええ「陽介」」

「「ユニゾン・イン! ! ! 」」

「ガルダイン! ! ! 」

何とか地面につく前に風が舞い上がり助かつたようだ。

「陽介は疾風属性だつたな」

助かつたのはいいが俺たちはガジェットにかこまれています。

その数約200体!!!!

「「ウソ〜ん」」

どうするんだ!! 「マスター」 どうつえ?

「私の名前を呼んでください」

いきなり決めるかよ! ?

「ええい、もうなんでもいい! ! ! 」

「私の名前を呼んでください」

「お前の名は・・・」

スバル side

「どうやあああ

とりあえずあらかたはかたづいたかな。

「スバルまだ来る! ! ! 」

「えつ? 」

転移魔法でガジェットが次々と出現する中・・・

「これじゃ、きりがない・・・」「お前の名は」まだ残つ

ている人がいた!?

「スバル、危ない!!--」

「間に合えつ!!--」

暁 side

「お前の名は「ラグナロク」だあアアア!!--」

「マスターを片山 暁と認証、set up」

「秘儀・疾風斬」

暁の周りに風が集まり、その風が剣に集まる。

剣を暁が振り放つた時、風が吹きあがり200体のガジエットが粉碎されていく。

「ふう、しゅうりょ「スバル危ない!!--」ちつ、まだいやがつたか」

「秘儀・真空斬」

スバルを狙っていたガジェットを破壊した。

「あ・ありがとうございます」

「いや、お礼なんかいいよ、君が無事ならね」

(ボンッ)

何故かスバルが気絶している。まあいいか。

そんなことしていのうちにガジェット転移してきたよ、  
多すぎだろ。

ティアナ side

なにをいちやいちややってんのよ・・・

この反応まさか！！！  
「二人ともあぶない」

暁  
side

「へつ？」  
これは、やばい！！！  
「飛竜一閃！！！」  
「大丈夫か？」  
そこに現れた人とは・・・

次回を待て・・・

蒼き閃光／大地に立つ／（後書き）

作者「来たー」

暁「何がだよ？」

作者「飛竜一閃だぜ、そりや勿論・・・」

暁「これ以上は作者の口がすべるんで次回を待て」

駄作ですみません

## 1. はじめにキャラクタ設定をひとつ（前書き）

今回は、キャラ紹介です。

「北山 暁とそのデバイスたち」

このテーマで紹介していきたいと思います。

## 【からだキャラ設定をひとつ

名前・・・片山 晓 【かたやま あきら】

年齢・・・16歳

体重・・・52キロ

身長・・・175cm

デバイス・・・ラグナロク 【剣】

特徴

生前は、関西と関東を引越しで行き来していたので、話し方が

若干変、基本馬鹿だが眼鏡が外れると・・・  
因みに姿は、ガンダムWのヒィロ・コイ

技

秘儀・疾風斬 【ひぎ・しづふうせん】

この技は、ユニゾンデバイス【以下UD】の陽介とユニゾン

している場合のみ使用可能、陽介の疾風魔法を曉のラグナロクに

集めてラグナロクの斬撃と共に周囲に解き放つ秘儀。

秘儀・真空斬 【ひぎ・しんくうざな】

この技は、UDデバイスの陽介とユニゾンしている場合のみ使用可能

陽介の疾風を体全身に纏い突撃し、居合い切りにする

秘儀。

名前・・・花村  
年齢・・・不明  
体重・・・不明  
年齢・・・

陽介

【はなむら ようすけ】

属性・・・  
身長・・・  
風・・・  
身長・・・  
30cmぐら  
い

名前・・・日向  
年齢・・・不明  
体重・・・不明  
年齢・・・

属性・・・  
身長・・・  
雷・25cmぐら  
い

「」からでキャラ設定をひとつ（後書き）

以上で、主人公紹介を終了します。

次回から、六課に入局か・・・

## 管理図への誘い（前書き）

今回は、ついに管理局へ  
主人公が  
行き着く場所とは・・・  
本編をどうぞ

## 管理局への誘い

いきなり、俺の田の前にいたガジェットの群れは姿を消した。

「大丈夫か？」

そう問われた時、俺はとうに言葉を発することができなかつた。

何故かつて？

いきなり目の前にガジェットの群れだよ？びびらない？少なくとも俺はびびつた、とにかく俺はびびりなんだ。まあ、それだけじゃなく彼女に見とれてしまったのだ。そう、彼女「シグナム」に・・・

「おい、大丈夫なのか？」  
とつさに声をかけられて多少びっくりしたが、今度は答えられた。

「えつ、ええ大丈夫です・・・」

答えたのはいいものの彼女の顔を直視できず・・・  
だつてさ、きれいじょん、凛々しいじょん、俺ファン

だし。

「そつか、ランスターは無事か？」

ああ、ティアナがいたな・・・

そう思つてゐうちに、俺の腕の中で眠るスバルが眼を覚ました。

「うん、ここは・・・？」

「おっ、起きたか。おはよーさん」

スバルはポケッとした様子から一変、みるみるうちに

顔が赤く

なつていつた。

「大丈夫です、下ろしてください……」

どうしたんだ、俺なんか悪いことしたのかなど考えて

いるとい

これまで黙つていたティアナが俺の顔をのぞきこんできた

「貴方を時空管理局に連行します！」

ああ、貴方は次元漂流者ですねてきなこと言わわれると思つてたんだが

そういう雰囲気ではなさそうだ。

「まあ、待てティアナ」

シグナムがそう言った。

「ですが！」

とティアナも食い下がるが命令には逆らえず折れてしまつた。

「すまんな、我々と共に来てもらえるか？」

シグナムの問いかけに俺は何の迷いもせずにこいつ答えた。

「いいですよ」と・・・

しかし、この選択が俺の命運を左右することをまだ俺は知らなかつた・・・

## （六課）

「主、はやて次元漂流者をつれてまいりました」

シグナムが律儀にそういうと中から

「入ってきてええよ～」

と聞き覚えのある声が返ってきた。

そしてそこに現れたのは、六課のトップ「ハ神」はやて」であった・・・

「君か、次元漂流者と言つ人は」

何かを探るように聞いてくるはやて、さてどう答えた

ものか・・・

「そうだよ」

俺の肩の上にいた陽介が答えていた。

「ほう～、君は？」

そう尋ねられた陽介は、

「俺は、こいつのロデバイスの陽介だ、こっちの青いのは日向だ。」

「蒼いのってなんだよ！～！」

などと日向が講義しているがそっとしておこう。

「そうか、ロデバイスね～で君は？」

そう問い合わせられ

「俺の名前は、片山 暁です。見ての通り迷子です。そう答えると、はやては暁ねえ～と唸っていた。

何か、まずかつたのだろうか？

「えつと・・・」

気まずそうにしているシグナムが

「主、まずは説明を」

「えつ、ああそりやつたな暁君こめんな」

ここからはじまり、管理局について、次元漂流者について説明をつけた。

そこから定番の台詞が登場

「暁君は管理局に入局せえへんか？」

ときたので、

「協力であればいいですけど、入局は・・・

「いや、それだけでも十分やわ～」

「こまでは、よかつたのです。

そう、問題はここからなのです。

「次に暁君に住んでもらつとこやけど・・・

そういうと、シグナムが

「主、主の家に迎え入れたらどうでしょ？」

と、俺が期待していた展開にもつていっててくれた。  
「うん、そつやなそうじょ、暁君はそれでええか？」

と問いかけてきたので俺は、はいと言ってしまったの

「暁君は16歳やんな、じゃあ学校にいかなあかんな。

この、一言がカオスへの入り口だったのです・・・

だ。?

## 管理図への誘い（後書き）

「モンハンがほしい…………！」

暁「何だよ突然？」

「みんなやつてから、俺もほしいんだよ…………！」

暁「小説の練習をしろ、それから勉強」

「なんだよ、何時になく毒舌だね暁君？」「…」

暁「知つてんだぞ、数学のテストの点数」

「うつ、ふん、赤点じゃないもんね～」

暁「3」「うおおおお」「でもか？」

「勉強します」

次回を待て……

転校先は夢の楽園（前書き）

わあ、学校にて、やあーー！

！

～暁の夢の中～

「ハハ、ハハハ？」

俺は、よくわからない霧の中についた。

田を凝らして霧の中の「——」を見ようとすると何も何かが邪魔をして見る」とはできない。

「I am the born of my sw  
ord」

そういうと、手には身に覚えがない剣が二刀あつた。

これで、戦えと言つことなのだろうか？

でも、誰と？

「人の可能性を見せてやる、いくぞ「——」！」

「――」

そういうて、その「――」に突っ込んでいった。

そうすると、相手が俺の頭を掴んでこいつ言った。

「君が「・・」を知るとはまだはやこ

もうこいつで、俺の田の前から消えた・・・

～八神家～

「おー、起きる」

「ひめちゃん、もう少し寝かせろ

「おいつたひ」

~~~~~

「起きやがれ……つや……」

「ひめちゃん、起きる」

あまりの激痛で目を覚ました。

そこには、小学生くらいこの女の子がいた・・・

「なにや、なんや?」

アのコビング今まで聞いたのか、はやてがやつて  
あた。

「うー、うー、うー、あかんやう」

「だつて　ここ　おきな　から」

痛みで「まご」と聞き取れないが、

「暁君、朝！」はんやで～」

といつ言葉は聞いたのでコンビングに下りていった。

：

すると、シグナムとシャーマル、ザフィーラがいたの

で、

急いで席に着いた。

朝食中は他愛のない会話が飛び交っていた。

登校の時間になつたので、席を立つとはやでが玄関まで

ついてくれた。

はやでが笑顔で

「いつからしあい」と言つてくれたので。俺も

「いつあまゆ」と思わず笑顔で返してしまつた。

（ただいま登校中）

学校につき職員室に行くと先生が近寄ってきた。

「えっと、片山 晓くん？」

「はい、そうですね」

「やつは、今日から君の担任になる「林 慶彦」だ。」

眉毛が太い先生だなあ～と思いつつ

「よろしく、お願いします」

と、頭を下げた

「君のクラスは2・E組みだ。」

と、朝のS.H.Rが始まった。

林先生が転校生の話題に持つていま

「片山へ、入って来い」

と言わされたので扉を開けて中に入った

「今日から、転校して来た片山 晓です。よろしく

おかげするかもしませんが、よろしくお願いします。

迷惑

「

「よし、晓や！」窓に向いている席に座れ

なぜ、下の名前で呼んだのか分からんが・・・

言われた、席に向かつた。

席に着くと、隣の生徒に声をかけられた。

「北山君、今日からよろしく。」

「ああ、よろしく」

「僕の名前は、「直枝 理樹」」

「うそ、嘘うそ、うそ、何故!?!?」

「あと君の隣にいるのは、「碓氷 拓海」君だよ」

「よろしく」

何がどうなってんだ?

転校先は夢の楽園（後書き）

暁「おーおーおー、何だこの展開はー…？」

作者「時代は、クロスオーバーにあるんだよ」

暁「いやいやいや、混ぜすぎだよ」

作者「好きなもん、混ぜたらこうなったんだ」

暁「どう、つなげていくんだよ！！！」

作者「おおまかにまとめて、みんな魔道士になる」

暁「ええ」

作者「今日はここまでだ」

暁「次回は、風紀委員長と生徒会長との出会い」

作者「それだけじゃないがな」

次回を待て

## 戦いの予兆（前書き）

つこに、会長たちと合流――――――

## 戦いの予兆

～数学の授業中～

何で、理樹と碓氷がいるんだ？

ここは、「りりなの」の世界じゃなかつたのか？

「うお～～、きいてんのか片山」

「・・・えつ、聞こてましたよ。」

「なに」の問題を解いてみる。

やべえ、ただでさえ数学は苦手なのに・・・

( めい、暁 )

おひ、なんだなんだ頭の中に声が響いてくる。

( 聞いてるか？ )

( もう、念話のことを持っていただけだ。 )

陽介は、呆れています・・・

( 今日、午後8時に公園に来い・・・ )

( 何があるの？ )

(後で書く。……いやあなた)

(咲希。)

(なんだよ、俺忙しいの)

(二)の問題わかるか?..)

(106。だよ)

「片山、まだか?」

先生が何かを期待しているが、

「106。です。」

先生は、少し間を置いてから

「正解だ、咲希」

あいつ舌打しきやがつた、俺が悪いの、いや悪くない  
でも、なんか腹立つな~

おつ、消しゴムが落ちてこる

みるみる俺、じつあるよ

投げる、放る、叩てる

よし、あえてあいつをつぶすか・・・

「うつ見えても、俺は甲子園優勝投手なんだよ〜ん

（くらえ、ジャイロイレイサー！――）

「ぎやあ

当たった本人は、俺をがんみ

俺、知らないふりを続けている

しかし、とある生徒「モアイ」によつ内部告発

「片山！――後で地獄の間に来い！――」

「へ～い

後で、モアイ殺す！――！――！――！――！

（鬼の間？）

ああ～だりい

そんなことを反省文を書きながら考えていた俺の元に

「すまない、またせてしまつたか？」

生徒会長が

「確かに、片山 晓だつたな？」

「はい、間違いありません。」

しかし、どつかで聞いたことのある声だな

「私は・・・」

何処だつたかな？

「生徒会長の・・・」

確か家で・・・

「鮎沢 美咲だ」

ああ～「みさちやん」だあ～ってえええ！！！

俺が驚愕してことりと・・・

「すぐに、風紀委員長が来るからな」

風紀委員長？あの人しか頭に思い浮かばない！！！

やばい、俺あの人への責めを凌ぎきる自信ねえ～！！！

「遅くなりました」

入ってきたのは、ピンク色の長い髪の綺麗な少女

きやがつたああああああああ

「二木 佳奈ヶ」であった。

～尋問中～

「すこませんでした。」

「本当に分かっているのか？」

「ああ、へた何回丑だよ」のやつ取り・・・

いい加減むかついてきたぜ

「暁は、悪くないよ会長～」

「げつ、」の声は

会長が何故か身構えている、何か戦いが始まるのだ  
るうか？

「やうだよ、佳奈ヶさん」

「直枝つ？」

「二木さんは、驚いている。

「なぜ、貴方がこじらへ？」

一木さんが理樹に問いかけると、理樹は、満面の笑みで

「リトルバスターズのみんなが退院したから、佳奈さん

報告しようかなあ～」

えつ、と驚いたままの一木さん

身構える会長

呆然とする俺

言葉を発したのは碓氷だった。

「なんか～、先生が曉に喧嘩を売ったみたいだよ～」

会長は、疑惑の顔をしながら俺に

「今のは本当か？」

と聞こてきたので、俺は

「まあ、まだ本当ですね」

すまなかつたと会長は落ち込んでいる

それを碓氷が慰めていた？

まあ、「うちはすんだ次はあつちだ。

「お姉ちゃん！……」

こきなり女の子が一木さんに抱きついた。

「葉瑠佳！……」

感動の対面をはたしていった・・・

さて、そろそろお暇しますか・・・

俺が出て行くとするべく、理樹に引き止められ

「暁、紹介したい人たちがいるんだ」

俺の予想が当たつていれば、リトバスの面々だらう

・・・いくしかないか・・・

「いいよ」

「本当に、じゃあ来て」

「恭介連れてきたよ、かれが・・・

「味噌汁の中で一番好きな具は？」

いきなり、テストがきやがつた

「ねぎ」

「合格」

「お前の名は？」

「片山 暁だ。」

俺は、恭介たちと別れ家に帰つていった。

そして・・・・

＼＼＼＼＼ 午後8時＼＼＼＼＼

漆黒の鎧をきた人物がいた。

「よし、いくか陽介・・・！」

## 戦いの予兆（後書き）

作者「無理・・・」

暁「混ぜすぎなんだよ」

作者「ごめんね」

次回

新たな魔道士覚醒

次回を待て

ここで、アンケート

恭介たちは、誰と恋愛すればいいか協力を

男性陣

恭介

真人

謙吾

幸村

など・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3797p/>

魔法少女リリカルなのは～蒼き閃光と呼ばれた男～

2010年12月14日22時28分発行